

一九三七年二月二三日、国民政府の中国の首都、南京が日本軍の手に落ちた。日本にとって、これは蒋介石の軍隊との半年にわたる揚子江における闘いの勝利の頂点であり、戦争の決定的な転回点だった。上海の英雄的な防衛戦が最終的に失敗し、最良の軍隊が深刻で重大な損傷を受けた中国軍にとって、南京の陥落は厳しい、おそらく決定的な敗北だった。

現在、南京は異なる種類の転回点であると考えられることができるかもしれない。この古都の城壁の内部で起こったことは、中国人にその奪還と侵略者の駆逐の決意を固めさせた。中国政府は退却し、再結集し、一九四五年によく終結した日本との戦争を、最後まで堅持した。この八年間、日本は南京を占領し、中国人の協力者による政府を樹立したが、その統治は信念にも正統性にも基づかないもので、到底、中国の降伏を強いることはできなかった。南京で発生した「レイプ」は、直後から世界中で問題になり、日本に対する厳しい見方が確定し、ほとんど修復不能なものになった。数世代にわたって日本の犯罪と失敗を教えられている中国では、今日でもそれは贖罪を求めるものである。六〇年後になっても、南京の亡霊は中国と日本の関係にまわりついている。

それも当然かもしれない。中国の首都での日本の暴行は恐ろしいものだった。兵士の大量処刑と数万人の市民の殺戮と強姦は、あらゆる戦争法規に違反して発生した。さらに驚かされるのは、それは公然

たる暴虐であり、明らかに意図された凶行だった。それは国際的な監視者たちの眼前で実行され、彼らの制止の努力をまったく無視して進行した。そして、七週間も継続したのであり、一時的な軍紀の崩壊ではなかった。アイリス・チャン女史が、南京の悲劇の英語による最初の完全な研究の中でかくも力強く語っているのが、この恐怖の物語である。

我々は、日本の司令官と兵士たちをその残忍な行為に駆り立てたものが何だったのかを正確に知ることはできない。しかし、チャン女史は、これまでのどのような文献よりも遙かに明確に、そこで何が起こったかを見せてくれる。そのために、彼女は本書において幅広い一次資料を採用している。たとえば、日本軍が入城した無防備な都市に残った外国の宣教師とビジネスマンの証言は、第三者的監視者の完璧な証言である。南京の人々を防御しようとする国際的な活動を指導したドイツのビジネスマンでナチ党員ジョン・ラーベの日記はチャン女史が発掘した文献の一つである。これは、単なる日記というよりも、実際には小規模な資料全集といったほうがよい。読者は、ラーベの眼を通して、日本軍の猛攻に向き合った無防備な南京住民の勇氣と恐怖を見る。読者はチャン女史の目を通して、都市が放火され、その住民が襲撃され、病院が閉鎖され、死体安置所が一杯になり、その周りを混沌が支配していたなかで、何とか事態を改善しようとしていたラーベたちの勇氣を知る。そして、そのとき、そこで、何が起こったかを理解して、それを恥と感ずる日本人たちについても知ることのできるものである。

南京大虐殺は西側の世界ではほとんど忘却されていた。そこに、この本の重要性がある。「忘れられたホロコースト」と呼ぶことでチャン女史は、第二次世界大戦における何百万人もの罪のない人々のヨーロッパでの殺戮とアジアでの殺戮の連携を描き出す。確かに、日本とナチズムのドイツが同盟国になっ

たのもつと後のことで、その当時には非常に緊密な同盟関係ではなかった。しかし、ヒトラーが全く異議を唱えなかった南京での出来事は、後に彼らの間に、暴力的な侵略者で、まさに「人間性に対する犯罪」と呼ぶべきものの加害者としての、道義的な共犯関係を成立させた。中国戦線を訪れたW・H・オーデン (W. H. Auden) ※は、この連携を、何よりも早く示した。

And maps can really point to the places

Where life is evil now :

Nanking; Dachau.

(そして、地図はまさにその場所を指し示す

そこでは、人生は今では邪悪である

南京、ダッハウ)

ウィリアム・C・カービー

ハーヴァード大学 近代中国史教授、歴史学部学部長

※ W・H・オーデン、*Collected Shorter Poem* (短詩集) 1930～1944 (London: Faber and Faber, 1950) 'In Time of War (戦争の時期)' XVI, pp.279-280.